



2012年 77歳

大江 健三郎(おおえ けんざぶろう、1935年1月31日 -)は、日本の小説家。愛媛県喜多郡内子町(旧大瀬村)出身。東京大学文学部フランス文学科卒。大学在学中の1958年、「飼育」により当時最年少の23歳で芥川賞を受賞。サルトルの実存主義の影響を受けた作家として登場し、戦後日本の閉塞感と恐怖をグロテスクな性のイメージを用いて描き、石原慎太郎、開高健とともに第三の新人の後を受ける新世代の作家と目される。その後、豊富な外国文学の読書経験などにより独特の文体を練り上げていき、核や国家主義などの人類的な問題と、故郷である四国の森や、知的障害者である長男(作曲家の大江光)との交流といった自身の「個人的な体験」、更に豊富な読書から得たさまざまな経験や思想を換骨奪胎して織り込み、それらを多重的に輻輳させた世界観を作り上げた。作品の根幹にまで関わる先人たちのテキストの援用、限定的な舞台において広く人類的な問題群を思考するなどの手法も大きな特徴として挙げられる。1994年、日本文学史上において2人目のノーベル文学賞受賞者となった。

私の出合った人々とその言葉が今日のテーマ。

過去20年位 水泳をやっていたが70歳位になり皆の視線を感じ水泳をやめ。
散歩は30年以上継続し健康を保っている。

恩師の渡辺一夫教授の年齢73歳を一つの生きる目標にしていたが既に77歳になってしまった。
若い頃、自分が乱暴な生活をしていたとき、渡辺先生から電話があり「平常な生き方が大切！」「いつまで生きたいか思い浮かべると良い」と諭された。

定義集(大江さんの近著)には色々な方々の言葉が入っている。

少年時代に一番印象の深い人は伊丹十三、高校2年の16歳の時、自分はいじめを原因に愛媛県立松山東高等学校に編入。転校先の東高校の廊下掃除をしている時にハンサムな伊丹に出会った。だまされて掃除をしていることを知った。お互い下宿生活だったので夜遅くまで話し、その後30分ほど歩いて道後温泉に行って風呂に入っていた。最初の一年間は綿密だった。

伊丹がフランスのルネッサンスのことを書いた本をかしてくれた。これを学校を休んで3日間読みふけていた。そしてこの本を書いた東大フランス文学の渡辺先生の所で学びたいと思った。東大入試のための2年計画をたて、伊丹君とも会わず受験勉強に集中。毎日アメリカ文化センター図書室で勉強をし、一年浪人で東大に入った。高校には一時間だけいて、後は図書館で勉強していた。

東大本郷で渡辺先生に習ったが、自分はこの人に会うために生まれてきた・・と思った。先生の本は全て読んだ。先生の素晴らしいのは、人はホカの人が考えたことと同じように考える(機械)もんだが、そうなってはいけない！「人間らしく考え、生きなくてはならない！」と言われていた。その言葉が自分の生き方になった。ヒューマニズム。

☆渡辺一夫(わたなべ・かずお)

1901年東京生まれ。東京大学仏文科卒業。東京高校(旧制)教授を経、東京大学教授。フランソワ・ラブレーの『ガルガンチュワとパンタグリユエル物語』全5巻の翻訳で有名。1975年没。

もともとはフランス語の学者、渡辺先生の後継者になりたかった。あるとき東大新聞に小説募集の広告をみて賞金1万円にひかれて応募(一月、5000円で暮らしていた時代)。1957年五月祭賞受賞作として小説「奇妙な仕事」が『東京大学新聞』に掲載され賞金をもらった。懸賞金は一万円と思っていたら2万円が入っていた。一万円返しに行ったが、最近優秀な営業マンが入り広告収入が豊になったので2万円入れたといわれた。

また、あるとき4人の人が集まっていた。麻雀をやる所だ。それまで麻雀そのものが何をやる場所なのかも知らなかった。そこで音楽家の武満とおるさんからEPレコードをもらった。音楽を聴いて、この人は天才だと思った。武満さんから小説家になりなさい。学校の先生はつまらない・・・と言われ小説家で生きていこうと決心した。

子供の光は障害を持ってうまれてきた。
ウグイスの音が聞こえると目が輝いてきた・・・

大学、「飼育」で芥川賞、これで作家人生を確かにした。そしてノーベル賞へ・・・自分は渡辺さんと武満さんとの間で人生をきめた。

☆武満 徹(たけみつ とおる、1930年10月8日 - 1996年2月20日)は、現代音楽の分野において世界的にその名を知られ、日本を代表する作曲家である。エッセイストとしても知られ、小説を手がけたこともある。

ある時、NHKの方が家にこられた。NHKの青年向け番組の脚本家と言って紹介されたのが井上ひさしさんだった。目が生き活きしていた。自分と同年配でそれ以来友人になった。

☆井上 ひさし(いのうえ ひさし、1934年11月17日 - 2010年4月9日)は、日本の小説家、劇作家、放送作家である。文化功労者、日本芸術院会員。本名は井上 厦(いのうえ ひさし)。1961年から1986年までの本名は内山 厦(うちやま ひさし)。遅筆堂(ちひつどう)を名乗ることもあった。日本劇作家協会理事、社団法人日本文藝家協会理事、社団法人日本ペンクラブ会長(第14代)などを歴任した。長女は元こまつ座主宰の井上都。三女は『激突家族 井上家に生まれて』著者で、2009年11月より株式会社こまつ座社長の石川麻矢。

憲法を大切にしている。
色々な方々との人間関係から大江文学は出来ている。